



大学生会話におけるスピーチレベル : 発話機能という枠組みから

賈, 璐

(Citation)

國文論叢, 50:48-27

(Issue Date)

2016-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/E0041129>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041129>



大学生会話におけるスピーチレベル

——発話機能という枠組みから——

賈 璐

1. はじめに

日本語の文体には、丁寧体や普通体といったバリエーションがある。日本人は意識的もしくは無意識的に相手や場面に応じて文体を使い分けている。従来の研究ではそのような文体はスピーチレベルと呼ばれ、普通体から丁寧体へ、また丁寧体から普通体へと切り替わる現象はスピーチレベルシフトと呼ばれている。

スピーチレベルの選択は日本語学習者にとって習得が難しい項目だと指摘されている。日本語教育の現場では「目上に丁寧体、同等や目下に普通体」「公的な場面で丁寧体、くだけた場面で普通体」「親しければ普通体、あまり親しくなければ丁寧体」とかいつまんで指導することが多いようである。実際の日常生活でスピーチレベルを選択することはそう単純ではなく、会話者の認識によって多様な姿がある。また、教える側は限られた時間内での教授項目を決定する際、学習者が発信者として「相手に対して失礼にならない」「相手を不快にさせない」ような表現をマスターさせることを重視する。しかし、学習者は会話の中で発話の受け手として、相手の言語行動を理解しなければならない場面もある。例えば、相手の言葉の使い分けに対する理解ができなければ適切な反応を返すことは難しく、対人関係を損なう恐れがある。良好な人間関係の構築と維持を重視するのであれば、実際の自然談話において常に起こるスピーチレベルの変容についても検討する必要があるであろう。

今まで、スピーチレベルの様態及びスピーチレベルシフトの生成の条件についての研究の蓄積は数多く存在するが、会話全体から統一した枠組みでスピーチレベルシフトを取り上げる研究は少ない。本稿では発話機能という枠組みを導入して、各発話機能における普通体の出現状況とスピーチレベルシフトを考察したい。

2. 先行研究と研究目的

先行研究では丁寧体の使用が基本となっている会話を資料にするものは数多く存在するが、スピーチレベルの使用頻度やスピーチレベルシフトが生じた条件と頻度を考察するのが一般的である。

スピーチレベルに関する研究には、一つの会話の中でそれぞれの話者の発話において各スピーチレベルが占める割合を示すことによってスピーチレベルの管理を分析するものが多い。そうした研究ではその会話が丁寧体と普通体のいずれをベースにしているかということは明らかになるが、各スピーチレベルがどのようなものによって構成されているかは分析できない。スピーチレベルを考察するのには頻度というマクロ的な視点だけではなく、一つ一つの発話を見るというミクロ的な視点も必要だと思われる。

宇佐美（1995）の調査結果によると、丁寧体から普通体へのダウンシフトの生起条件は①心的距離の短縮、②相手のレベルに合わせる時、③ひとりごと、自問をするとき、④確認のための質問、答えをするとき、⑤中途終了型発話のとき、が挙げられるということである。三牧（1993）は重要部分（結論・結末・意志・事実・論点等）の明示、強調また注釈・補足・独話等の挿入のときに丁寧体から普通体へシフトするということを主張している。さらに、三牧（2002）はボライトネスの観点から丁寧体基調の会話でのスピーチレベルシフトを接近ストラテジーとして取り扱っている。そのほか、陳（2003）は「ダ体発話」へのシフトを情報の受信を示す時、情報の整理を示す時、感情の表出を行う時の三つに分類し、申（2007）は「同調」という「相手のスピーチスタイルシフトに合わせたシフト」に着目しその生起環境を考察した。

上述の研究はスピーチレベルシフトの生起条件を分析して得られたという点で研究成果として重要である。しかしながら、実際にそのような生起条件が満たされていても常にスピーチレベルシフトが起こるわけではない。そのような場合で、スピーチレベルが変化せずに会話の基調を維持した理由は明らかになっていない。

本稿は大学生による自然会話の中の男子会話データを取り上げ、発話機能という枠組みを取り入れて丁寧体基調の会話で各発話機能における普通体の現れを明らかにすることを目的とする。また、普通体が現れやすい発話機能で普通体が現れていない場合について、その理由も探ってみたい。3節では会話データと本研究の考察に用いる発話機能という枠組みを説明する。4節では普通体の現れが比較的多い発話機能と少ない発話機能を挙げている。主に普通体に注目しながら、発話機能ごとに普通体と丁寧体の内訳を考察する。5節で本稿をまとめる。

3. 研究方法

3.1 調査概要

調査協力者は20代前半の日本人男子大学生5名であった。データのバラエティを保証すると同時に個人差をできるだけ減じるために、1名（JM）のベース話者を設定して、彼にはかの4名の対話者とそれぞれ二回会話をしてもらった。ベース話者と対話者は初対面の関係である。一回目の会話の後、二日をあけて二回目の会話を実施した。会話の時間は二回とも20分ほどであった。社会的な属性を対等にするために、全員を大学三年生とした。調査協力者の出身地を表1に示す。

表 1 調査協力者の出身地

	JM（ベース話者）	JM1	JM2	JM3	JM4
出身地	奈良	大阪	京都	京都	北海道

神戸大学の図書館のグループ学習室において、自由会話をしてもらい、その様子を録画、録音した。会話終了後、録音した音声ベース話者に文字化してもらった。3.3で述べるスピーチレベルの分類基準に従って1発話¹⁾ごとにコーディングを行って集計した。4組（8回）の会話の総発話数は3357であり、ベース話者の総発話数は1581である。また、補助的資料として、作業終了後に協力者に対してフォローアップインタビューを行い、スピーチレベルに関する意識や会話に対する印象などを確認した。

なお、本調査において収集されたすべてのデータは、日本語研究の目的に限って第三者に公開されることについて、調査協力者の了承を得ている。

3.2 スピーチレベルシフトと発話機能

本研究では宇佐美（1998）を参考にして、スピーチレベルを「丁寧体」「普通体」「中途終了型」と三分類²⁾する。今回収集した会話はすべて丁寧体を基調にしている。本研究は普通体に注目し、同一会話の中で観察された同一話者の基本的スピーチレベルからほかのスピーチレベルへの変化をスピーチレベルシフトとする。今回収集した会話の中で出現した普通体発話の総発話数における割合は23%であることが分かった。

ポリー・ザトラウスキー（1993）は主として日本語の「勧誘の談話」の展開の仕方、《気配り発話》や《思いやり発話》の特徴等について検討するために「発話機能」という分析観点を用いている。しかし、ポリー・ザトラウスキー（1993）は「勧誘の談話」を分析対象にしているため、勧誘するという目的があるのに対し、本研究で扱う自然会話では調査協力者ははっきりした目的を持たずに会話を進め、互いにいい人間関係を保つことを目的にしているため、両者の発話内容が異なっている。したがって、本研究ではポリー・ザトラウスキー（1993）の発話機能を一部修正し、1. 【情報要求】、2. 【情報提供】、3. 【意志表示】、4. 【自問】、5. 【感想】、6. 【解釈—注目表示】、7. 【理解—注目表示】、8. 【同意—注目表示】、9. 【感想—注目表示】、10. 【冗談】、11. 【関係作り・儀礼】、12. 【談話表示】³⁾に分類した。

4. 各発話機能における普通体の現れ

以下、すべての会話が丁寧体を基調にしている中で、普通体が生起する状況について、発話機能という枠組みを用いて分析を行いたい。

グラフ1⁴⁾は8回分の発話で各発話機能において普通体が生起する割合を示している。【自問】は54%が普通体になっており、最も高い割合を占めている。続いて【感想—注目表示】は43%、【解釈—注目表示】は29%の割合で普通体になっている。一方、比較的普通体が現れる割合が低い発話機能を三つ挙げると、【情報提供】の11%と【情報要

求】の 9 %と【感想】の 5 %がある。

グラフ 1

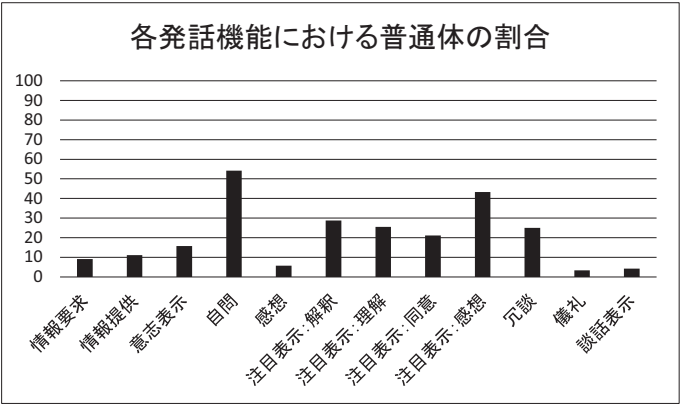


表 2 は各発話機能における普通体の出現数と総発話数である。【冗談】、【関係作り・儀礼】、【談話表示】は該当する発話が極端に少ないため、表 2 では省くことにする。

表 2 各発話機能における普通体の出現数と総発話数

普通体の出現数/発話機能ごとの総発話数	情報要求	情報提供	意思表示	自問	感想	注目表示：解釈	注目表示：理解	注目表示：同意	注目表示：感想
一①	6/79	17/188	0/2	3/3	3/30	4/19	4/19	4/18	5/15
一②	4/51	9/178	1/2	3/6	1/27	6/16	7/26	6/29	3/11
二①	9/72	34/196	0/6	1/1	1/25	2/8	11/25	0/7	12/15
二②	5/49	24/182	1/5	1/3	2/44	1/7	11/30	6/16	9/18
三①	2/49	25/202	2/10	1/4	1/30	3/14	5/20	7/21	7/16
三②	4/34	20/163	1/6	0/0	1/32	3/10	2/18	6/20	4/15
四①	7/51	9/127	0/5	4/6	0/27	4/6	4/13	1/16	5/13
四②	2/40	22/182	1/5	2/2	4/23	1/6	3/24	1/21	5/10

注：「一」は第 1 組の会話、①は一回目の会話を示す。以下同様。

4.1 【自問】、【解釈—注目表示】、【感想—注目表示】

以下、収集した会話における個々の発話（下線部）に注目していきたい。

今回は三組の二回目の会話以外、すべての会話に【自問】の発話が観察された。先行研究では自問の場合は聞き手に向けて発話するのではないため、普通体で起こることが多いと述べられている。しかし、今回の会話の中で【自問】は 54%の発話が普通体に

っており、残りの 46%が丁寧体として発話されている。予想通りに普通体として現れた【自問】が半数を超えているが、丁寧体が 46%も占めていることに注目したい。

普通体になっている自問は「思考中」と「疑い」である。

以下 a1. における下線部のような例は「思考中」である。JM は自分の専門にある「ミメシス」という言葉を話題にした。JM1 の意識は「ミメシス」という言葉を聞いてからその瞬間に言葉の意味そのものに移り、目の前にいる聞き手から意識が抜けているように思われる。即ち、その発話で言及した話題について、話し手⁵⁾が何らかの情報や意見を考え出そうとしている時に普通体で【自問】することが多い。

a1.

JM : なんか、暗喩のことちょっとカッコよくなんかミメシスっていうんですよ。

【情報提供】

JM1 : ミメ、ミメシスですか。【情報要求】

JM : はい。【情報提供】

JM1 : え、メタファーのことですね。【解釈—注目表示】

JM1 : だから、普通に、比喩ですね。【解釈—注目表示】

JM : はい。

JM1 : 暗喩、えー何語やろ。【自問】

JM1 : たぶんなんかの言語ですよ、たぶんそれ、メタシスとか。【情報提供】

「疑い」は a2. の例によって示す。JM1 は所属大学と他大学の女子の雰囲気と比較して、後者は見た目がおしゃれだと話している。JM はそれに興味を示し、他大学の女子学生が普段通学する道を歩いてみたいという意志を表示している。JM1 は JM の通学時間が他大学の女子学生と不一致ということを知って、まだ「いるかな」と JM が他大学の女子学生に出会えるかと疑いを抱いている。このような「疑い」は 3 例だけあり、3 例とも「かな」を文末に用いている。

a2.

JM1 : 女子力とか、(笑) そんなケバいいのかわかんないけど (はい)、なんかそういう、空気があって (はい) こう綺麗にこう差別化図られてるんですよ、要は。

【情報提供】

JM : あー。

JM1 : 一発でわかるみたいな感じなんですよ。【感想】

JM : 面白いっすねー、なんか。【感想—注目表示】

JM : 明日、そっちから行きますわ。【意志表示】

JM1：なんか時間にもよります、なんか。【情報提供】

JM1：いつも 1 限の時間来てます？【情報要求】

JM：いや、来てないですね。【情報提供】

JM1：あー、いるかな。【自問】

JM1：なんか、10 時に集まる、10 時、2 限が 10 時 40 分ですよ。【情報提供】

JM：はい。

JM1：その時間に行ったらまだいますけど、だいたい歩いてる子たちは、やっぱり 8 時 50 分目指していくんで、（あー）その時間行くと、もう綺麗に歩いてるんですよ、てんてんてんと。【情報提供】

一方、会話の基調の丁寧体を維持した自問は「フィラー的な表現」と「思考中」である。

私たちは日常生活での会話においてよどみなく流暢に伝達内容を交わしているわけではない。「ええと」「なんか」と言って、昔のことを話そうとして回想したり、次に話す内容を考えて言葉を探したりしている。『日本語教育事典』は「そうした時に、「あいう」とか「えーと」というようなことばを発する。これを「言いよどみ」(フィラー filler)と呼ぶ。」と記述している。

b1. のような例は「フィラー的な表現」である。b1. では食堂に来ている人がちゃんと勉強している人かということは二人ともにわかりようがないため、考えても決まった答えがない。b1. の下線部はそのような特に決まった解答がない話題についての意見を聞かれるときに、意見を持ち出す前に間をつなぐようなフィラー的な表現といえる。その時に話し手は聞き手を意識して発話していると考えられる。したがって、その発話で言及した質問に明確な解答が存在せず、話し手は自分の意見を提示する前にフィラー的な表現として【自問】する場合に丁寧体として現れることがある。

今回のデータでは「フィラー的な表現」は丁寧体の発話にだけ観察された。それは間をつなぐことは会話を不自然でなく進めるためのものであって、相手を意識して発した言葉であるため、聞き手目当ての状況に使われる「デス・マス」と相性がいいからだと考えられる。

b1.

JM1：で食堂もめっちゃ減るようになります。【情報提供】

JM：え、もう来てる人はじゃあ、ちゃんと勉強したい人…？【情報要求】

JM1：どっちなんですかね。【自問】

JM1：僕、かん、その、二パターンあると思うんで、来る人は一、真面目に、なんか大学行かないといけないから来てるっていう（はい）なんも考えてないだけっていうパターン（はい）と、なにか別にやりたいことがあるからそっちをやる

からそれを優先してるだけ（あー）の二パターンあると思ってて。【情報提供】

「思考中」の例は b2. である。JM5 が JM にサッカーのスタジアムを紹介している場面である。JM は JM5 の紹介を聞いてスタジアムの外見のイメージをつかむことができ、「あーなんでしょう」とそれを表現する言葉を考えていることを示している。

b2.

JM5：はい、どっちもできて、これも、フィールドとスタジアムが近くて、(はい)
あと、なんか、屋根がなんかこうなってるんですね。【情報提供】
JM：あーなんでしょう。【自問】
JM5：だから、なんだろう。【自問】
JM：膨らんでる。【解釈—注目表示】

以上のように、【自問】では「思考中」という意味を表す時に普通体と丁寧体の両方とも観察された。しかし、表3からわかるように、言葉を探したり何かを考え出そうとしている「思考中」は普通体として現れることが多い。それは「思考中」の場合、話し手は考え事に意識が移り、聞き手から意識が抜けていることが多いため、聞き手の存在しない状況でも用いられる基本的なスタイルである普通体が用いられやすいのだと推測する。

表3 スピーチレベルにおける【自問】の各用法の使用数

	思考中	疑い	フィラー
普通体	12	3	×
丁寧体	4	×	4

【解釈—注目表示】では【自問】に続き、29%の比率で普通体にシフトした。【解釈—注目表示】の例を分析した結果、その話題が話し手にとって新しい情報で理解が確かかどうかをすばやく確認する場合に普通体にシフトしていることがうかがえた。普通体にシフトした発話はさらに「共話」と「言い換え」と「理由づけ」に分けられる。

c1. のように話し手が考えがまとまってから発話するのではなく、相手が話すことを悟って一つの発話を完成させる例がある。これは「共話⁶⁾」である。JM が高校でつけられたあだ名を大学で使ったら広まったという文脈である。JM3 は前文で JM の今のあだ名が高校の時と同じものだということが分かったため、高校時代のあだ名が大学に入って広まったということが推測できた。即ち、話し手が相手の発話について共通の理解ができて、未完成の発話を引き取って完結させたり、相手への賛同や理解を示したりする「共話」的な話し方の場合である。水谷（1993）は共話的な話し方をする理由を説明する際に、「楽しい」、「気が楽」、「心を暖かくする」ということを挙げている。【解釈

一注目表示】で普通体を選択する割合が比較的に高いのは共話的な話し方をする理由を裏付けているのではないと思われる。

c1.

JM : で、理系のクラスに行ったときに、なんか理系のやつにいわれて、だからその、その授業の時間だけ言われてるあだ名やったんですけど、でも大学は行ったらあだ名何とかいうじゃないですか。【情報提供】

JM3 : はい、言われますよね。【同意—注目表示】

JM3 : 今もそうですもんね。【情報提供】

JM : はい。

JM : んーだら、なんか言わなと思ってその時だけのあだ名を言ったら、

JM3 : ひろまった。【解釈—注目表示】

JM : 面白いなみたいな、でひろまったみたいな。【情報提供】

また、相手の未完成の発話を受け取って補うのではなく、直前の相手の発話を理解した上でまとめて言い換えたりして説明するような場合がある。このような発話は「つまり」という接続詞を文頭につけることができるため、「言い換え」と呼ぶ。例えば c2. では JM4 がサッカーのチケットはチームの強さでチケットの値段が異なるという説明を受けて、JM が「1000 円違う」と解釈している。

c2.

JM4 : そうですね、ヴィッセル神戸はちょっと高くて、面白いことやってるんですけど、ヴィッセル神戸だけ（はい）他は違うんですけど、うーんと、あんま強くないとことやるときは（はい）2200 円で、いろいろ席種があるんですけど、（はい）一番安いところだと（はい）一番安くてもあ、それなりに安いところだと（はい）一番、あ、一番っていうかあまり強くないチームと試合するときは 2200 円で、（はい）強いチームと試合するときは 3200 円っていう。【情報提供】

JM : あー、1000 円違う。【解釈—注目表示】

JM4 : そう、1000 円違う、分けて。【同意—注目表示】

JM : あ、でも思ったより全然安いです。【感想—注目表示】

次に、相手の発話に理由をつけてその発話を理解し賛同していることを表明している「理由づけ」の場合がある。c3. では JM が通学定期券を紛失した事件に対し、JM1 は 6、7 月に定期券をなくしてもそれほど困ることではないと話している。JM は「もう

残ってない」、即ち、定期券の使用期限が近くなったからという直前の相手の発話が成立するための理由を説明している。

c3.

JM : えー、あの、昨日定期を落としたんですよ。【情報提供】

……

JM : で、そこまでいっちゃって、あれがないないないないないってなって、焦って駅員さんに聞いたら（はい）なんか梅田にあるよつつて（あーあーあーなるほど）で戻って、取りに行って。【情報提供】

JM1 : わざわざ。【理解—注目表示】

JM : はい。

JM1 : 今五月だからまだまあなくすの困る時期ですよ。【情報提供】

JM : はいはい。

JM1 : 6、7月くらいになくしてももうえっか、てなるじゃないですか。【情報提供】

JM : あーあーあーまあ、もう残ってない。【解釈—注目表示】

JM : えーと、まあ定期が僕もう近鉄地下鉄阪急できてるんで、（あーそっか）三駅分の定期とあと学生証入れてたんですよ。【情報提供】

それに対して、丁寧体として発話した場合は、相手の発話の意味が明白で特に確認することがなく、その発話が当然であることをサポートするかのように相手の代わりに理由、または結論を述べたりする場合である。言わば相手の話に調子を合わせて相づちを打つような場合である。

上記の「共話」と「言い換え」と「理由づけ」はいずれも話し手が直前の発話を急いで確認するものであり、その直前の発話は例外なく内容的に直接関係する【情報提供】である。それに対して丁寧体の場合は必ずしもそうではない。JM は JM1 が奈良学園に関する記憶に対して理解を示してからそのような記憶を持つ理由を説明している。JM1 は JM による解釈を同意して相手の発話を繰り返している。

d.

JM1 : 僕、##（N学園）。【情報提供】

JM : あ、##（N学園）。【理解—注目表示】

JM1 : 大阪から通ってて（はい）うん、だるかったなって記憶しかないですけど。
【情報提供】

JM : あ、そうですね。【理解—注目表示】

JM : ##（N学園）森の中にありますもんね。【解釈—注目表示】

JM1：森の中、山の上ですね。【同意—注目表示】

JM：えー…。

【感想—注目表示】は普通体へのシフト率が43%である。普通体へシフトした発話が置かれている文脈を観察してみると、感想を表す形容詞や形容動詞を裸で用いるか、終助詞「なー」などをつけて使用することがほとんどである。相手の発話を受けて、「へー」「うわー」などの感動詞を用いて勢いを帯びて発話することによって、話し手の心が動かされている程度が演出されている。ただし、発話例を観察してみると、心が動かされている程度が高ければ高いほど【感想—注目表示】が普通体になるというわけではないようである。

まず、相手の直前の発言によって心が動かされて発生した気持ちを抑えられず表すものの例を挙げると、e1.がある。この場面は会話者二人が初対面で自己紹介をする時である。相手が提供した情報から、話し手は二人が同じ学年だということを知り、安心して緊張が解けたような口調で「よかった、よかった。」と話した。

e1.

JM：あ、文学部、##大学文学部三回生の##（名字）です。【情報提供】

JM1：あ、同い年、同じですね。【解釈—注目表示】

JM：同じです。【同意—注目表示】

JM：はい。

JM1：よかった、よかった。【感想—注目表示】

JM1：え、どこのつながりからここ、この感じになったんですか？【情報要求】

しかし、特に相手の発話に心を動かされているわけではなく、相手の発話意図を悟って同調したり、一般的にそのような表現をするような反応を求められているものもある。

相手の発話意図を悟って同調するものはe2.のような例である。JM3は自分の彼女がサッカーに詳しいということをJMに説明している。JM3が、「むっちゃ知ってる」「そこまで知ってる」「完全サッカーオタク」といった表現を使って、自分よりサッカーの知識が豊富だという彼女のことを自慢しているように聞こえる。JMはJM3のその気持ちを悟って、彼女をほめてもらいたいという意図に合わせて「すごいなー」と話したと推察される。

e2.

JM3：そんな感じで、なんかしかも日本じゃなくてヨーロッパのサッカーがめっちゃ好きで、（はい）でその選手とかもむっちゃ知ってるんですよ。【情報提供】

JM : はい。

JM3 : え、もう、誰みたいな。【情報提供】

JM3 : そこまで知ってるかみたいな感じ。【情報提供】

JM : あもう、サッカーオタクというか。【解釈—注目表示】

JM3 : もう完全サッカーオタクですね。【同意—注目表示】

JM : すごいな。【感想—注目表示】

JM3 : こっちがちよっと知識つけないあかんみたいなの。【情報提供】

一般的にそのような表現をするものとして e3. を挙げる。e3. はこの二人が初対面でお互いに専門を紹介している場面である。JM は自分の専門の内容を紹介してから、JM3 は「なるほど、すごい」と感想を表している。特に心が動かされるほどの内容でもなく、JM がわざと何かの意図を持って自分の専門を紹介しているわけでもない。経営学を専門にしている JM4 は自分の専門と異なることを、文学部に在籍している JM に紹介してもらってから、お世辞のように「すごい」と話した。

e3.

JM4 : ふーん、文学部ってどんなことされてるんですか、今は？ 【情報要求】

JM : 僕は、えっと、文学部の、芸術学専修っていう（あー）なんか、研究室みたいななんなんですけど、（はい）あの一、なんでもよくて、絵とか（うん）音楽（うん）えー、漫画、写真（えー）そういう、大体のもん行けるんですけど、（はい）研究対象として、それを、まあその作品のなりたちとか意味とか、そういうのを研究する（うん）感じです。【情報提供】

JM4 : なるほど、（はい）すごい。【感想—注目表示】

JM : いや、全然すごくないですよ。【感想—注目表示】

即ち、以上の三つの例は話し手の抑えられない気持ちや文脈があるため、話し手は何かを「反応」せずにはいられない状況に置かれている。それに対して丁寧体を維持した場合、話し手は相手の発話を聞いてある気持ちや感想を相手に自ら「伝達」ということに主眼が置かれている。

以下の f. の例は法学部の JM1 は JM から文学部は期末試験がないということを知って、心から「いいなー」と感心したものと思われる。その後「めっちゃうらやましいっす」と相手に自分の感想を伝えている。本心から抑えられない「反応」を示してから、感想を対人配慮を表す「デス・マス」を用いて発した。

f.

JM1：文学部って、なんて単位とれるんですか、そんなに？【情報要求】
JM：だいたいレポートで、(はい) しかも、まあ出席も 30 パーぐらいいいくんで。
【情報提供】
JM1：じゃあ期末ないんですか？【情報要求】
JM：そうですね。【情報提供】
JM1：えーいいなー。【感想—注目表示】
JM1：めっちゃうらやましいっす。【感想—注目表示】
JM1：(え) めっちゃうらやましいっす。【感想—注目表示】

4.2 【感想】、【情報要求】、【情報提供】

九つの発話機能の中で【感想】は普通体が現れる割合が最も低い。相手が話した事柄に対して感想を述べる【感想—注目表示】において半分近くが普通体として現れているのに対して、自分が話し手として開始した話題の中の事柄に対して感想を述べる【感想】においては普通体の生起率がわずか 6 % である。

【感想】における普通体の例を観察してみると、「思考中」⁷⁾と「補足」という二つの使い方に分けられる。「思考中」は過去のことを思い出したりしている最中に発した所感である。例えば gl. である。

gl.

JM4：僕高校生のときモチベーションとかなかったですもん、受験に対する。【情報提供】
JM：あー。
JM4：なんかなんか、
JM：まあそうですね、確かに今思えばなんか、もっと色々あったなーって思いますよね。【情報提供】
JM4：(笑) そうやなー。【同意—注目表示】
JM4：懐かしい。【感想】
JM4：もう 3 年前とかんとき。【感想】
JM：そうですねー。【同意—注目表示】

gl. では二人は高校生の時の大学受験に対するモチベーションについて話している。JM4 は高校時代のことを思い出しながら「懐かしい。」と所感を述べている。「補足」というのは相手に提供している情報をさらに理解しやすいように自分が感じ

たことを加えるものである。例として g2. である。

g2.

JM1 : も、もんが、まず校門がなんか（はい）石造りであるんで、（はい）女学院って感じなんですよ。【情報提供】

JM : あー。

JM1 : ちょっと細ーい山道をこう、上がっていくんですけどなんか、（はい）そこをなんか、日傘さして、ヒールでなんかカツカツ。【情報提供】

JM : 日傘さして。【理解—注目表示】

JM : えー。

JM1 : みたいなイメージのもうやめてくれて感じですよ。【感想】

JM1 : 勧誘しようにもなんかビラを、ビラをなんか、ガッて渡すとすごいなんかもう、おどおどされる感じの（はいはい）おとなしいなんか守られて育った感じの女子たちが（はい）いたりする空気。【感想】

JM : えー。

JM1 はK女子大学の女子学生を JM に言葉によって描写している。女子学生の歩く姿をリアルに説明している上に、臨場感を醸し出すために想像した画面を補足に説明している。

丁寧体の例は普通体より圧倒的に多いが、「思考中」と「補足」という用法が観察できなかった。また、丁寧体の発話で「ね」や「よ」など話し手の認識を聞き手に示すという伝達機能を持っている終助詞が付加されるものがほとんどであることから、【感想】は伝達性が強いことが裏付けられる。h. はその例である。

h.

JM : EU 加盟国やったらビザなしで。【情報提供】

JM2 : ビザなしでしかも飛行。【情報提供】

JM2 : しかもなんか格安航空がヨーロッパの間であって、（へー）国と国でも簡単に行き来できるし。【情報提供】

JM : うん。

JM2 : いいですよ。【感想】

JM : イタリアやったら、なんですか、ピサの斜塔とか。【情報要求】

JM2 : ピサの斜塔行きましたね、一瞬だけ。【情報要求】

h. で JM2 は貯金して海外旅行に行ったりする話をしている。ヨーロッパの国での旅

行の情報を提供しながら、「いいですよ」と積極的に旅行の感想を相手に示している。

次に、普通体として現れるのが二番目少ないのが【情報要求】の発話で9%である。本稿の分析対象は大学生による初対面と二回目の会話であり、二人の話者がお互いについて基本的に未知の状態であるため、会話を進めるには情報を要求して話題を切り開いてから、相手から返してくる返答に詳しく確認したり、新たに情報を要求したりすることが予想できる。このような【情報要求】はほかの発話機能より発話数が多いわりに、普通体として現れる割合が比較的低い。

【情報要求】の発話の普通体に注目すると、新しい話題を開始する位置には普通体を用いて情報を要求する発話がほとんど見当たらなかった⁸⁾。普通体発話の中、直前の相手による【情報提供】の発話に対する「確認」が大半を占めている。このような「確認」の発話は「はい」「いいえ」で答えられる。例えば i1. である。

i1.

JM3：えーその、なんていうん、広告でしたっけ？【情報要求】

JM：はい。【情報提供】

JM3：広告をつ、つくる？【情報要求】

JM：つくるーやつです。【情報提供】

JM3：え、それは、例えばどういうイベン、イベントというか、企画とかやってるんですか？【情報要求】

i1. は JM3 は JM が広告関係のサークルに所属していることを思い出してそれを話題にした場面である。JM3 は丁寧体を使用して回想を表す「っけ」で相手に広告関係のサークルということを確認して新しい話題を開始した。相手から肯定の答えを得て、そこからさらに「広告をつ、つくる？」とサークルの活動を確認した。丁寧体の発話にも「確認」の用法があるが、それと普通体での「確認」とどのように異なっているかは今後の課題にする。

「確認」以外、直前の相手による【情報提供】の発話から更に情報を要求するような例は5例だけ観察できた。前の話題から派生した質問であるため、「二次的な情報要求」と呼ぶ。このような発話は疑問詞が使われ、疑問詞が指示する内容を答えることが要求され、「はい」「いいえ」で答えることができない。例えば i2. である。

i2.

JM：いやー、それがねえ、復帰すると今まで滞納してた新歓費とか全部払わないとだめなんですよ。【情報提供】

JM3：あー。

JM3：きついですね。【感想—注目表示】

JM：ええ、ちょっとそれがね、一回生なんか、入ってた記憶を抹消したいんですけどね。【意志表示】

JM：3回生から入る人やと思ってほしいみたいな。【意志表示】

JM3：はいはいはいはい。【理解—注目表示】

JM3：なるほどね、僕、この前払いました、新歓費。【情報提供】

JM：あ、いくらぐらいした？【情報要求】

JM3：4000円。【情報提供】

j2. はサークルに入った時の新入生歓迎会の費用に関する話題である。JM3がこの前新歓費を払ったことを話したことに對して、「いくらぐらいした？」と更に情報を聞きだしている。このような疑問詞が使われる【情報要求】の発話は普通体で現れるのは稀で、基本的に丁寧体で発話されていることが観察された。

【情報提供】は発話数が1418であり、発話機能の中で発話数が最も多い。話者は相手に情報を求められてきた時にその要求に応じて情報を提供することが要求される。この場合は一発話で済ますこともあれば、複数の発話が必要な時もある。また、相手に求められなくても自ら情報を提供して話題を作る場合もある。このような原因で【情報提供】の発話数が多いのである。【情報提供】の発話例の中で、普通体になっているのは11%に過ぎない。本稿で設定した初対面という条件の下では丁寧体で情報を提供するのが一般的だといえる。

【情報提供】が普通体になっている発話例を観察してみると、聞き手にとって文脈から導かれる一般的な予想と反する意外な情報や感想などを提示する時に普通体にシフトすることが分かった。

例 j1. では JM2 はイギリスの料理がおいしくないという話をしている文脈で、四行目に「けど」という逆接を表す接続詞を使って「フィッシュアンドチップス」というイギリスの有名な料理を話題にした。有名な料理であることに言及し、相手に有名であるからおいしいだろうと思わせて、「うーん、て感じ。」⁹⁾と望ましくない評価を下した。事柄が異なった方向へ行ってしまうという聞き手にとって意外な変化を表す時に、さらにプラスアルファとして普通体にシフトして変化させることによって相手を驚かせたり笑わせたりする効果をもたらそうとしているようにうかがえる。最後の行で JM は意外な展開で笑ったことから、スピーチレベルシフトによる戦略が効果的だったと言えよう。

j1.

JM2：イギリスはあんまり美味しくないです。【感想】

JM：あー、それいいですよ。【同意—注目表示】

JM : それなんかジョークみたいなんでありますよね。【情報提供】
 JM2 : けど、なんか、フィッシュアンドチップス、
 JM : はい。
 JM2 : って結構有名じゃないですか。【情報提供】
 JM2 : それ一回食べたんですけど、うーん、まあ、うーん、て感じ。【感想】
 JM : (笑) 美味しくない? 【情報要求】

j2. もその例である。

j2.

JM : ヘーテレビを? 【情報要求】
 JM3 : テレビ、むっちゃちっちゃい、あの、ピンクのテレビなんですよ。【情報提供】
 JM : ピンク、なんでそれ買ったんですか? 【情報要求】
 JM3 : 高校の時に、(はい) なんかラスト一台みたいな。【情報提供】
 JM : あー。
 JM3 : で、安くなってるからって買って。【情報提供】
 JM3 : うーん、まあ色合いは、気にしない。【情報提供】
 JM3 : まっピンクで、リモコンもピンクで。【情報提供】
 JM : えー。
 JM3 : こんなほしいう人いるかなとかいったら、
 JM : すごい女の子の家みたい。【感想—注目表示】
 JM3 : ですねー。【同意—注目表示】
 JM3 : 黒人の男の子。(笑) 【情報提供】
 JM3 : それほしいうか言って。【情報提供】
 JM : あー、逆にでもいいですね。【感想—注目表示】

また、宇佐美 (1995) は相手のスピーチレベルに合わせて普通体になり、或いは共通の話題があったときお互いに心理的な距離が近くなって普通体になったりすることがあると指摘している。そのほか、申 (2007b) は「同調」を「相手のスピーチレベルシフトに合わせたシフト」と定義して、話し手が確認するために質問し、聞き手がそれに答える際に「同調」が起りやすいと報告している。本稿の会話にもそのような「同調」が観察され、例 j3. がそのような例である。

j3.

JM : ええ、ちょっとそれがね、一回生なんか、入ってた記憶を抹消したいんですけどね。【意志表示】
JM : 3 回生から入る人やと思ってほしいみたいな。【意志表示】
JM2 : はいはいはいはい。
JM2 : なるほどね、僕、この前払いました、新歓費。【情報提供】
JM : あ、いくらぐらいした？ 【情報要求】
JM2 : 4000 円。【情報提供】
JM : あ、でも、安いというか、まあまあということですかね。【感想—注目表示】
JM2 : うーん、そうですね。【同意—注目表示】

【感想】の普通体の例を考察する時に、「補足」という相手に提供している情報をさらに理解しやすいように自分が感じたことを加えるものが観察された。これと近い性質の発話例は【情報提供】にもあり、相手に提供している情報をさらに理解しやすいように詳しい情報を加えるものである。例えば j4 である。

j4.

JM1 : 大阪なんかごみごみしてるみたいなんあるじゃないですか。【情報提供】
JM : はいはいはいはい。【理解—注目表示】
JM1 : ちょっと現れてるんですよ、## から。【情報提供】
JM1 : なんかこう、突っ込みのなんか質のなんか汚さみたいなど大阪にあったりして、あの、(あ、うーん) 口調キツイですよ、大阪基本的になんか。【情報提供】
JM : あー、まあまあまあそうですね。【同意—注目表示】
JM1 : ちゃうやろばけーとか、普通にボケとか出てくる、日常会話で。【情報提供】
JM : はいはいはいはい。【理解—注目表示】

JM1 は大阪人が口調がきついのを詳しく説明するために、下線部の発話を付け加えて情報を補足している。

そのほか、相手の発話の中のキーワードが聞きとれず、無意識的なようにそのキーワードを繰り返す場合に普通体が使われる。また、自分の発話は相手が聞き取れない時にキーワードを繰り返して提示する場合も普通体が用いられる。j5. がその例である。

j5.

JM2：樟葉はわかります？【情報要求】

JM：くうは？【情報要求】

JM2：樟葉、樟葉。【情報提供】

JM：あ、樟葉はわかります。【情報提供】

上記の四つの場合は丁寧体として発話されることもある。そのうち、「確認—答え」の隣接ペアには「同調」していない場合も観察された。4.2で【情報提供】における普通体の例として出された例 k. がその中の一つである。

k.

JM2：とどう高校って知ってます？【情報要求】

JM：うーん、し、知らない。【情報提供】

JM2：知らない、あんまり有名じゃないと。【理解—注目表示】

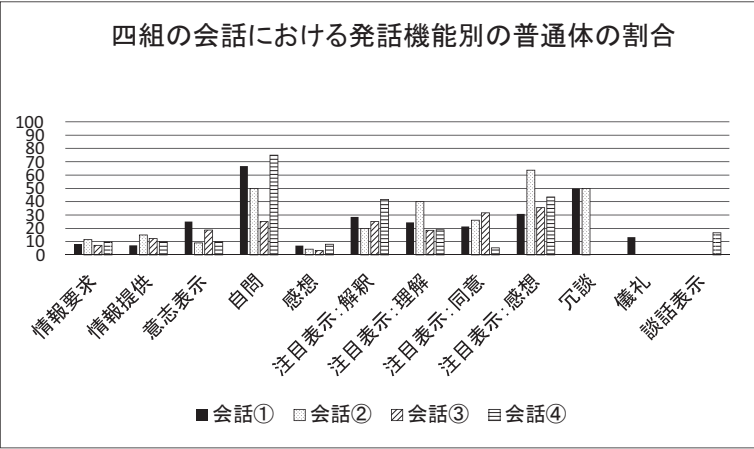
JM：うーん、でも、僕の、確かになんか、他の地域の高校ってやっぱ知らないですね？【情報要求】

JM2：うん、うんうん、全然知らん、うん。【情報提供】

例 k. の下線部の発話は、「わからない」という情報を伝達すると同時に相手が確認している意見に素早く同意を示している印象を与える。このように、「確認—答え」の隣接ペアには「同調」する場合としない場合がある。当該の場面に応じて話し手があるニュアンスを出したい時にあえて同調しない場合もある。即ち、「確認—答え」という発話機能の視点のほか、言葉が用いられた状況を考える語用論の立場からの考察も必要と思われる。

4.3 【冗談】、【関係作り・儀礼】、【談話表示】

グラフ 2



グラフ 2 は 8 回の会話で、2 人の発話者の総発話においてそれぞれの発話機能における普通体が生じた割合を示している。【冗談】と【関係作り・儀礼】と【談話表示】という三つの発話機能は、会話の組や回によってそもそも該当する発話が見当たらなかったか、普通体として出現しなかったということがグラフ 2 に反映されている。そのため、この三つの発話機能を個別的に見ていくことにする。

【冗談】は会話③の二回目と会話④の一回目に該当する発話がなかった。今回は 14 例の中で丁寧体として出現したものが 3 例ある。普通体のほか、「～みたいな」や「～しない」となどで終結する中途終了型発話も見られた。例 1. で JM は冷静な口調で誇張的な言い方をすることによって相手を笑わせている。

1.

JM3：芸術学専修って、(はい) なにをやるんですか？【情報要求】
.....

JM：まあそういうのとか、(うん) その一、まあ最終的には卒論を書くのを見据えてやるんで、(うんうん) なんというか、卒論して、なんかそこがメインポイントは弱いんじゃないとか、(うーん) なんか、論理的にちょっとずれてるとか、(うんうんうんうん) なんか欠陥があるとかいうときは指摘される感じですね。【情報提供】

JM3：うん、へー。

JM3：なんかそれ、将来は、どういう…【情報要求】

JM：いや将来は、たぶん、ないんじゃないですか？【冗談】

JM3：（笑）あ、でも、大学の研究員とかやったらあるんじゃないですか、そういう？【情報提供】

【関係作り・儀礼】は「感謝」、「陳謝」、「挨拶」等の良い人間関係を作る発話で、43例のうち、普通体の発話はわずか2つしかなかった。会話の開始部と結尾部でお互いに挨拶するときによく用いられている。普通体の2例は会話①の二回目に現れ、一つは相手の中学校の所在地に何もないと誇張に評価を下してから笑いながら「ごめんなさい」と謝る例で、一つは自分の言い間違いに気づいて「ごめん」と言ってすぐ間違いを訂正する例である。

【談話表示】は18例のうち、1例だけが普通体になっている。その1例は二人が話題に詰まり、沈黙の中でJMが「うーん、そうだなー。」と言いながら話題を考えている例である。

5. おわりに

本稿は発話機能という枠組みを取り入れて初対面丁寧体基調の会話で各発話機能における普通体の現れを考察した。また、普通体の現れの多い発話機能と少ない発話機能をそれぞれ3つ挙げて、主に普通体に注目しながら普通体と丁寧体の内訳を分析した。その結果として、以下の2点が明らかになった。

①【自問】と【解釈—注目表示】と【感想—注目表示】が普通体として現れることが比較的多かった。

【自問】において、普通体になっているのは「思考中」と「疑い」であり、丁寧体を維持したのは「フィラー的な表現」と「思考中」である。

【解釈—注目表示】において、普通体になっているのは「共話」と「言い換え」と「理由づけ」であり、丁寧体になったのは相手の発話の意味が明白で特に確認することがなく、その発話が当然であることをサポートするかのように相手の代わりに理由、または結論を述べたりする場合である。

【感想—注目表示】において、普通体になったのは話し手の抑えられない気持ちや文脈があるため、話し手は何かを「反応」せずにはいられない状況に置かれている場合である。それに対し、丁寧体を維持した場合、話し手は相手の発話を聞いてある気持ちや感想を相手に自ら「伝達」ということに主眼が置かれている。

②【感想】と【情報要求】と【情報提供】が普通体として現れることが比較的少なかった。

【感想】において、普通体になったのは「思考中」と「補足」である。丁寧体の例は普通体より圧倒的に多いが、「思考中」と「補足」という用法が観察できなかった。

【情報要求】において、普通体になったのは「確認」と「二次的な情報要求」である。疑問詞が使われる【情報要求】の発話は普通体で現れるのは稀で、基本的に丁寧体で発

話されていることが観察された。

【情報提供】において、聞き手にとって文脈から導かれる一般的な予想と反する意外な情報や感想などを提示する時、相手のスピーチレベルに合わせる時、相手に提供している情報をさらに理解しやすいように詳しい情報を加える時、繰り返しの時に普通体になることがある。普通体になる四つの場合は丁寧体として現れることもある。

今回はデータ数が少ない中、実例を挙げながらケーススタディを行った。今後は会話コーパスを利用してさらにデータ数を増やし、本稿で得られた結果を検証していきたい。なお、本稿で得られた男子会話の結果を女子会話と比較し、同じ結果が得られるかどうかを検証する。

注

- 1) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ) 2011 年度版」を参考に発話文の認定を行う。
- 2) 本稿はスピーチレベルを丁寧体、普通体、中途終了型という三分類をしており、「うん、はい」などの相槌を「その他」に入れている。今回のデータは「その他」を含んでいない。
- 3) 1. 情報要求：知識や意見の提供を求める発話で、「質問」の類が多い。2. 情報提供：実質的内容を伝える発話で、客観的事実に関する質問に対する答えも含む。3. 意志表示：話し手の感情、意志等を表示する発話で、それらに関する質問の答えも含む。4. 自問：相手に向けない独り言の発話である。5. 感想：自発的に事柄に対して感想を述べる。注目表示（感想、同意、理解、解釈）：相手の発話、相手の存在、その場の状況・事物の存在などを認識したことを表明する。6. 解釈：相手の発話を受け手の側から理解して説明する。7. 理解：了解を示す発話である。8. 同意：相手の意見に賛成すること。9. 感想：相手が言った事柄に対して感想を述べる。10. 冗談：情報や意見をふざけて言う発話である。11. 関係作り・儀礼：「感謝」、「陳謝」、「挨拶」等の良い人間関係を作る。12. 談話表示：談話の展開そのものに言及する「接続表現」、「メタ言語的発話」などを含む。
- 4) 10. と 11. と 12. は発話数がほかの発話機能より大幅に少ないため、割合を比較するより個別的に見ていくほうが適切だと思われる。
- 5) 本稿における「話し手」は例文中の下線が付いた発話の話者を指す。
- 6) 水谷 (1993) 参照。
- 7) 【感想】における「思考中」と【自問】の「思考中」は近い性質を持っているため、同一の呼び方にする。
- 8) 直前の話題が終了して新たな質問をする時に普通体を用いたのは以下の例しか見当たらなかった。

JM2: えー、そうなん、写真見たいですね。【意志表示】

JM : え、しらべ、調べたら出てくと思います。【情報提供】

JM2: えー、でもう一個? 【情報要求】

JM : もう一個が広告研究会アドタスっていうんですけど、まあ広告作るサークルです。

【情報提供】

JM2: うんうん。

JM : なんか、ええ、知らないですね？【情報要求】

9) 例 m. と例 n. は体言止めであることから、「普通体」と言い難い面があるという指摘を受けた。それはスピーチレベルとスピーチレベルシフトに関する一連の先行研究（宇佐美 1995、三牧 2007 など）は体言止めを「普通体」あるいは「ダ体」に入れているため、先行研究に従っているのである。実際に会話対象を先生のような目上の人に変えると、体言止めが相応しくない場合がある。例 m. において JM を親しくない先生にしたら JM2 は体言止めを使わない可能性が十分にある。以上のことで、本稿は体言止めを「普通体」の分類に入れることにする。

【参考文献】

- 宇佐美まゆみ (1995) 「談話スタイルからみた敬語使用—スピーチスタイルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662号、27-42。
- 宇佐美まゆみ (1998) 「ディスコース・ポライトネス・ストラテジーとしてのスピーチレベル・シフト」『平成10年度日本語教育学会秋季大会予稿集』110115、日本語教育学会。
- ザトラウスキー・ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版。
- 申媛善 (2007b) 「相互行為からみたスピーチスタイルシフト—聞き手による「同調」に着目して—」『筑波応用言語学研究』No.14、59-72。
- 陳文敏 (2003) 「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト—生起しやすい状況とその頻度をめぐって—」『日本語科学』第14号、7-28。
- 日本語教育学会 (編) 『新版 日本語教育事典』大修館書店。
- 水谷信子 (1993) 「「共話」から「対話」へ」『日本語学』第12巻第4号、明治書院、4-10。
- 三牧陽子 (1993) 「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要 I 人文科学』42巻1号、39-51。
- 三牧陽子 (2002) 「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に—」『社会言語科学』第5巻第1号、56-74。
- 三牧陽子 (2007) 「文体差と日本語教育」『日本語教育』134号、58-67。

(か ろ／神戸大学大学院生)